



# みすず

## 脳の活性化には読書がいちばん

館長 塩入 秀敏

本年4月、館長に就任しました。よろしくお願いいたします。

ところで、今年6月17日(月)の産経新聞に興味深い記事が載っていました。脳科学に関するものですが、行動の抑制や情動の制御という高度な精神活動を司っている前頭前野が活発に働くのはどうしている時か、という研究成果についてのものです。



- ・音楽を聴く(クラシックでもポップスでも)……脳はほとんど活性化していない
- ・コンピュータゲームをする……脳は活発に動き出すが、脳の後ろの部分が中心
- ・足し算を一生懸命早く行う……前頭前野を含む脳の広い範囲が働き出す
- ・漢字を覚える……読んで覚えるよりも書きながら覚える方が前頭前野が活性化する
- ・読む(黙読で文章を読んで理解しようと努める)……さらに多くの領域が活性化する
- ・読む(音読)……活性化領域は最大となる

ということで、脳の活性化のためには読書が最良であることがわかります。音楽を聴く場合に脳がほとんど活性化していないのはリラックス状態になっているからだそうです。

乳幼児の内から本に親しませるブックスタートという事業が始まっています。子供にとって絵本は「心のミルク」と言われていますが、皆さんにとって本は何でしょう。脳のカンフル剤でしょうか。図書館では、皆さんの足が向くように快適で親しみやすく使いやすい図書館づくりに努めますので、皆さんには大学生らしく脳を活性化させる読書をたくさんしてもらいたいと思います。

## 目次

脳の活性化には読書がいちばん	館長 塩入 秀敏 …………… 1
読むという対話	講師 市東 賢二 …………… 2
私の短大生活	幼児教育科2年 宮村 恵 …………… 4
うすい本がありました	日本文化学科1年 石田 智美・宮野 とも …………… 5
児童文化研究大会に出席して	幼児教育学科1年 杉田 燈里 …………… 6
図書館実習を終えて	国文科2年 鎌田可奈子 …………… 7
図書館ニュース	…………… 8

# 読むという対話

講師 市東 賢二

今回この『みすず』の原稿を依頼された時、正直なところ何を書いたらよいものか、考えあぐねていた。図書館報という性格のものに執筆するのであるから、図書館に関係することか、書籍に関することか、といったところが題材であろうが、幼い時から図書館や図書室が余り得意ではない。こんなことを書くとは叱られそうだが、どうにも苦手なのである。確かに現在の職業を別にしても、本を読むのは好きである。量的な問題でいえば、おそらく高校時代が一番量をこなしていただろう。なにせ、一度に3種類のものを平行して読むという乱読振りであった。家で1冊、通学時間用に1冊、学校で読むためにもう1冊といった具合であった。そんな訳だから、図書館がどうにも苦手というのが、自分でもよく分からないのであった。そんなある時、最近のことなのだが、大学院時代の指導教授と久し振りに会い、酒を呑みながら大学院時代の私の話になった時、後輩が「市東さんの家はほんとに本だらけだったんですよ（当時私の部屋はキッチンに書庫といったような間取りだった）。」と言ったのを受けて「あの人は本を集めるのが趣味だからね。」とおっしゃったというのを聞いて、「そう言われればそうだな。」と妙に納得してしまった。おそらく本好きの人の中には、読むのはもちろんだが、集めるのも好きと言う私のような人もいないのではないだろうか。

そんな私が書けることと言えば、読むことについてであろう。大学時代からの恩師、故早坂泰次郎先生にある時「本を読むと言うことは、その本の筆者

と対話することだ。」と言われたのを今でも覚えている。本は自分で勝手に読んで解釈することでもなければ、著者の述べることをそのまま吸収できるようなものでもないと言う意味であろうと受け止めている。しかしそんなに単純なことではないのである。対話などと言うと、大層なことのようにあるが、まさにその通りである。目の前に著者自身がいないからといって対話が成立しないということはない。誰しもが、感動した本や、影響を受けた本が1冊くらいはあるだろう。私にも小説、専門書を問わず少なからずある。例えば塩野七生の『チェーザレ・ボルジア』や江國香織の『落下する夕方』、または岸田秀の『ものぐさ精神分析』、ウィトゲンシュタインの『論理的・哲学的論考』、R. C. クワント『人間と社会の現象学』等々。どれも著者の世界へ飛び込んでいったものや、書面を通して議論したものばかりである。

読むことが対話であるということは、書かれたものを鵜呑みにしたり、「その通りです。」と言って白旗をあげるばかりが、読むことのすべてではないということである。印象に残る1冊の本を見つけた時の喜びは、例えようのないものであるが、それはあたかも大切な人との出会いのようなものである。まさしく身も震えんばかりのことなのであるが、当然、そうそう巡り逢えるものでもないだろう。1冊の本と出会えるかどうかは全くの偶然であるが、だからといって宝くじのようなものとは少し違っている。もちろん宝くじは買わなければ当たるはずがない

し、買ったからといって当たるともかぎらない。当然1冊の本との出会いも読まなければ出会えないし、読んだからといって出会えるとは限らない。しかし、決定的に違うことは、宝くじを買う訓練というものがあるかどうかは知らないが、対話するには訓練が必要だ。当然訓練が未熟な間は、出会いも見逃してしまっている。後から読み返してみても、別の魅力に出会うこともしばしばである。どれだけ訓練すれば事足りるのかは、はっきりいって分からないが、スポーツと同じに怠ければ、当然それは鈍り、元のようにするには以前に倍する訓練が必要になる。かくいう私も、しばらくさぼっていたがために以前のように読んでいるつもりが、全く頭に入らず、当然対話する所ではなく、大変な思いをしたことがある。

思いがけず、修行であるかのような話になってしまったが、いうまでもないが、本が好きだからこそ、である。嫌々読むのでは訓練も何もあったものではないし、ただ垂れ流していても仕様のないことである。

最近若者の読書離れが進んでいるとかいえないかという話題を耳にすることがあるが、そこにどのようすれば本を好きになるかという話は、性急すぎるのかも知れない。著者やタイトル、もしくは表紙に、何でもよいのだが興味や関心を持つかどうかの問題かとも思う。無関心であるものをいきなり好きになるのは無理があろう。興味や関心があるから読もうとするのであり、読むから好きになるかもしれないのである。それはその本のテーマかも知れないし、著者かも知れないし、勘違いかも知れないが、何にしても好きになるから読むといったものでもない。読み続ける人はもうそれだけで好きになっているのだ。対話するために読むといえば大袈裟であるが、読むことで字面をおうだけでなく、著者の世界に飛び込めたなら、一つの言葉に出会うかも知れない。出会わないかも知れない。一つでは済まないか

かも知れない。読めば必ず皆同じところに眼をつけるとは限らないというのも、読むという対話の醍醐味かもしれない。

対話とは同じ形で表れるとは限らない。むしろ同じではあり得ないといっておく方がよかろう。なぜなら読む人がそもそも違うのだから。読書会などで回し読みをしながら共通感覚をまず整理しましょうというのは、あくまでも対話への準備体操のようなものである。読書という限り無く個人的な出来事ではあるが、最低限の約束事が存在する場合がある。専門書などはその傾向が強いといっておく方がよかろう。相手と議論するにもルールがあるようなものである。相手の意図を全く無視しては議論もへったくれも無いのである。それは読書会を通じて先達から学ぶこともあれば、同様の人たちが集まることによって探し出すことであったり、若い人の新しい解釈がうまれることであるかもしれない。そうしたことから著者との議論や対話が始まるのだろう。小説においても同じようなことがあるだろう。小説に感情移入することは、例えば主人公になり切ってしまうようなことに表れるかもしれない。主人公になって物語を体験することは、小説や物語を読むことの醍醐味であるが、これも基礎工事なのかもしれない。読者として著者の世界に飛び込むということは、同時に著者の世界をこちらが引き受けることでもある。

そんな対話という世界が読むということには含まれているのではないかと思う。読むことは著者と自分の世界の体験を共有することであるし、著者との対話によって自分の世界の広がりを感じさせられる瞬間なのではないだろうか。そんな自他の境の区別も定かにならない対話へのコミットメントと関係への問いの世界を体験されてはいかがであらうか。



# 私の短大生活

幼児教育科2年 宮村 恵

私の短大生活の2年間は充実していて満足だと言える自信があります。1年生の時は新しい環境に慣れるのが精一杯で、毎日同じことを繰り返している気がして不満な時期もありました。言い換えれば、暇な時間を持て余して、退屈だったのかもしれませんが。

そんな時、足を運んだ先が図書館でした。幼い頃からあまり本を読む方ではなかったし、むしろ活字を読むことに面倒臭さを感じていたもので、高校までは図書館とは全く無縁の生活でした。しかし、短大の図書館にもそれ程期待することもなく寄ってみたところ、思いがけなく想像以上のものが返ってきました。絵本や育児参考書・料理本など様々な種類・・・それだけではありません。最近のヒット曲のアルバムや、世界の名作だらけのレーザーディスクやビデオ・DVDなど、豊富な種類に感動しました。それからというもの、空き時間には図書館通いが日課になりました。

活字嫌いの私も、自分の興味を持った本、特に子育て戦争のエッセイ本などは、寝る時間を惜しんでまで読書に熱中していました。

2週間実習時の部分実習の材料も、図書館の本からヒントを得ました。手遊びの本や時案の書き方事例集などを読み事前に学習して実習に臨めたのも、幼児教育関係満載の附属図書館ならではのだったと思います。図書館では、レポート提出やテスト期間、缶詰め状態になり勉強した思い出があります。自分の部屋では怠けてしまい、思うようにいかないことが多いのですが、図書館に来ると落ち着いた雰囲気のおかげで自然にペンが動き順調に勉強がはかどるので不思議です。

2年生になって就職活動や実習・卒業研究と毎日があわただしく過ぎていきますが、今まで20年間生

きていて、毎日がこんなにも楽しいと思ったことはありません。私は今、11月の学海祭に向けて実行委員の一員として、毎日奔走しています。12時を回っても仕事をしていることもめずらしくなく、今はラストパートを駆け仕事に取り組んでいる所です。パンフレットの下書きを完成させ印刷会社へ持っていった時、各スポンサーにパンフレットを全て配り終えた時、例え小さな作業でも一つひとつの仕事が終わると、何ものにもかえがたい達成感で一杯になります。何ヶ月もかけて準備してきたことが3日間で終わると思うと、「今までの苦労は何だったの」と考えたくなるかもしれませんが、最近はそのように考えることもありません。

私の好きな芸能人が、あるテレビドラマの中で『今を生きろ』と言っていました。このたった一言が私の心の中で強く残り今の自分があるのだと思います。

短大生活の限られた2年間の中で、学生の間でしか出来ない体験を私なりに探し、思う存分楽しんでやってきたことが、私にとっての大きな財産です。



# うすい本がありました

日本文化学科1年 石田 智美  
宮野 とも

初めて絵本を読んだ時のこと覚えてる？

母親のおなかの中にいたときに読んでもらっていたり、まだ気持ちも表せないときや外で遊び回るほうが楽しかったときにも、読んでいたかもしれないね。でも、はっきり覚えているのはきっと、幼稚園・保育園に入ったときなんだろう。私たちは園で月に一回絵本をもらっていたんだよ。先生に読んでもらったり、家に持って帰って家族に読んでもらったり…時には待ちきれなくて、自分で読んだりもしたんだ。かわいらしい絵を見て喜んだり、逆に、自分の気に入らない絵を見てふてくされたりしたものだね。とにかくあの頃は“絵”本ってかんで、内容なんて関係なかったんだ。

今は？今も絵本って読んでる？ぶ厚い本ばかり手にしているんじゃない？

でもね、今だから分かる絵本の楽しみかたっていうのもあるんだよ。昔大好きだった本を読み返してみても、「百聞は一見にしかず」って言うでしょ。きっと小さな頃は気付かなかったモノが見えてくるよ。たとえば絵本って何かを伝えてると思わない？ポーと眺めていても分からないけれど、少し意識をしただけで、見えてくるものもあるはず。ここでちょっと『花さかじいさん』の話を思い出してみよう。

—小さい頃はただ単純にポチがかわいいことと、死んじゃってかわいそうってだけだったね。—でもよく考えてみると、あれはおじさんとポチのお互いを思う気持ちが、金を出したり、きれいな花を咲かせたりという数々の奇跡を起こしたのではないかな。こう考えてみると、昔話はけっこう奥がふかいね。でも、それは昔話だけに言えることではなくて、絵本全般に言えることなのかもしれない。昔話は善悪を伝えたりしているものが多いし、絵本の中には親切や思いやりなどの人の在り方を教えているものもある。こんな大切なことを絵本が伝えようとしているなんて、小さい頃は思ってもみなかった。でも、今読むとそのことが分かるんだ。

今絵本が見直されてきている。様々な絵本が多く出版されている中で同じようなことを伝えようとしているものもあれば、全く別のことを伝えようとしているものもある。単純素朴な絵本だけれども、ぶ厚い本よりも人間として大切なことを多く教えてくれている。それは子供たちに絵本を多く読んであげる最大の意味なのかもしれない。知識ではなく、人として大切なことを教えてくれる絵本を一度童心に返って読み直してみるのもいいだろう。



# 児童文化研究大会 に出席して

幼児教育学科1年 杉田 燈里

先日の10月12日（土）に上田女子短期大学において開催された児童文化研究大会では、午前中に北野講堂においてクッキングプロデューサーの山本麗子先生の講演をお聞きし、午後は四つの分科会の中から興味のある分野を選んで出席しました。

山本麗子先生の講演では、『食事』の意味について深く学ぶことが出来たように思います。バランスのよい食事が心身共に健康な人間を育てるということはもちろんですが、もう一つ重要な役割として、人との絆を築く場であるということがあるのだそうです。

毎日の食事を家族と共に楽しくいただくことで、人は自分の居場所があることを実感し、前進していく支えに出来るということです。そう言われてみると、一人暮らしの今、たまに恋しくなって思い浮かべてしまうのは、家族そろって食事をしている情景だったりします。そんな時に、家族が共に過ごした時間の中で食事が大きな存在感を持っていたことを感じます。

現代では、核家族化や労働時間の増加などの影響もあるのか、家族全員でそろって食事をする家庭が減っています。そのことは、少なからず子ども達と家族との在り方に影響を与えるようです。子ども達

がバランスよく安心して成長していくためには、食事の在り方も考えていく必要があると感じました。

午後は第二分科会を選び出席しました。そこでは、塩田中央保育園の中山まゆ美先生が『保育園でどんなところ？』という題でお話し下さいました。私は、保育所実習を控えていたので保育所の様子を詳しく知りたいという思いでお話をお聞きしました。

塩田中央保育園では様々な活動を行っていて、とても興味深かったのですが、中でもライオン組さんの子ども達が物語りを創りあげたことと、上田市でも保育サポーター制度が導入されていることが印象に残りました。

中山先生は、ライオン組さんとお話し創りを実現するために、活動の大分前からライオンのぬいぐるみを印象づけたり、童話を絵を見せないで読み聞かせるなどしてきたそうです。あくまでも子ども達が自発的に活動出来るような配慮を心掛けていて、子ども達も『やる気』で活動をしていたように見えました。

保育サポーター制度とは最近注目されている制度で、新しく上田市でも導入されたものです。園に数人の定年を過ぎたおじいさんが来て、遊んだり園舎の修理をしたりするのだそうですが、サポーターの方は子ども達に大人気だそうです。保育の現場にいつもの保育者以外の人が訪れることで、子ども達も学ぶことも多いだろうし、保育者の届かない部分にも目が行き届くようになればよいと思います。

今回初めて大会に参加しましたが、学ぶことがとても多かったと思います。

## 本学の先生方の新刊書

（平成十四年中に刊行された単独著書・共著・分担執筆）

（著者五十音順）

長田 真紀先生

\* 『日本史―有名な兄弟』

（新人物往來社 一六〇〇円／共著）

\* 『教科書が教えない日本史』

―素朴な疑問―

（新人物往來社 一六〇〇円／共著）

北村 恵子先生

\* 『音楽教育における「不易」と「流行」』

―音楽教師の在り方を求めて―

（教育芸術社 二〇〇〇円／共著）

原 史子先生

\* 『子ども家庭福祉・保健用語辞典』

（資生堂社会福祉事業財団 非売品／分担執筆）

\* 『保育をめざす人の児童福祉』

（株式会社みらい） 二〇〇〇円／共著

菱田 隆昭先生

\* 『寺子屋の教育内容・教育方法に  
関する実証的研究』

（上田女子短期大学 研究室） 共著

〔日本学術振興会科学研究費補助金・基礎研究第二次報告書〕

# 図書館実習を終えて

国文科2年 鎌田 可奈子

私は今年の夏休みに上田市立図書館で図書館実習を体験した。学外の図書館での実習は今年度が初めての試みということで、私はとても緊張していたが、実習先では快く受け入れてくれた。期間は一週間で、同じ司書課程を履修している友人と一緒にいろいろと大切な事を学ぶことが出来た。

初日からすぐにカウンターに入り、私は返却処理作業を担当した。図書館が開館すると、利用者は次々に返却する本を持ってカウンターへとやってくる。処理する本がだんだんたまっていくばかりで、頭がパニック寸前になったが、職員の方に助けをもらい、何とか切り抜けることができた。

もう一つ驚いたのは、図書館職員の挨拶である。利用者が返却本を持って来ると、職員の方が「おはようございます」と笑顔で声をかける。利用者も「おはようございます。ありがとうございました」と言って本を返していく。そのやりとりは側で見ていて、とても気持ちの良いものだった。見習って、私も「おはようございます」と声をかけるが、なかなか声が出せない。それでも利用者の人々は気持ち良く挨拶を返してくれて、とても嬉しかった。時間を区切り、友人と作業を交替したが、貸出カウンターの方がやるが多かった。カウンターでは貸出以外にも予約本、レファレンスなども行う。本を元の場所へ戻す配架作業は初日の午前中に館内の配置を覚えてもらったので、少しやり易かった。

3日目は、特殊コレクションの返却と移動図書館「やまびこ号」の乗車を行なった。

上田市立図書館には、花月文庫などの「特殊コレクション」と呼ばれる図書がある。特殊コレクションの本は貸出返却作業の際、慎重に取り扱わなければならないものなので、緊張していたかもしれない。

同日の午後は市立図書館の「やまびこ号」に乗車

した。私はこれまで「移動図書館」というのを見たことも利用したこともなかったので、自動車の見た目だけで緊張していたらしい。同乗した職員さんが「楽しんでいいよ」と笑顔で言われたことで、少し楽になった気がしたけれど、やはり少し緊張していた。

午後の巡回場所は五力所くらいで、住宅街や団地が多かった。下は小学生くらいから上はお年寄りまで幅広い利用者が、「やまびこ号」を楽しみに待っている。場所ごとに違う年代層の利用者がいて戸惑ったが、何とか対応することができた。

また、市立図書館では「ハンディキャップサービス」という録音図書作成サービスを実施している。

丁度、実習中のある日が録音日だったので、ダビング作業を手伝い、その後自分たちの声を吹き込んでみることにした。聞いている人に聞きやすい声の調子や話し方に注意しながら実践したものの、自分ではあまり上手くいかなかった。

一週間という短い時間ではあったが、学んだことが沢山あった。学校の勉強だけでは身につかないこと、自分で動かなければわからないことがたくさんあった。近い将来、実践で活かせるように頑張りたい。



図書館ニュース

本年の図書館の諸行事から

\*\*\*幼児教育科卒業制作作品展\*\*\*

近年、幼児教育科の卒業研究に紙芝居、手づくり絵本、手で見える絵本、しかけ絵本等を制作するグループが増加しています。

そこで図書館では、この5月20日から6月20日までの1ヶ月間、ここ数年の卒業制作作品展を閲覧室で開催しました。



\*\*\*第三回 図書館主催「七夕文学賞」受賞作品\*\*\*

恒例となりました七夕文学賞も、本年は下記のみなさんの作品が受賞となりました。

優秀賞 短歌 国文科 2年 上條 靖奈

「吹く風は 笹の飾りを 吹き抜けて 天の二人に 想いとどけよ」

佳作 短歌 国文科 2年 高野 裕美

「美しく 流れる星を 川と見て 水面に 映る恋いも ゆらめく」

佳作 俳句 国文科 2年 小沢 優香

「なみだ雨 七夕の夜に 君慕ふ」

佳作 自由詩 幼児教育科2年 甘利みなみ

「夏草の丘をぬけて透きとおる  
夜空を見上げた  
今はただ 幾千万の星の河に  
かなわぬ願いを託すことしかできず  
冷たい風に吹かれて  
あの歌を口ずさんだ」

(添削は長田真紀先生)



編集後記

図書館報“みすず”第29号をお届けいたします。お忙しい中執筆くださいました皆様に心からお礼申し上げます。

今年は例年よりも早い冬の訪問にびっくりしています。しかし、こたつに入ってみかんの傍らに、ゆっくりと文に目を通す時間が長くなりそうで、楽しみです。

(山)



みすず

上田女子短期大学附属図書館報  
第29号 2002.12.発行

編集 上田女子短期大学図書館紀要委員会  
発行 上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620  
TEL : 0268-38-6019  
FAX : 0268-38-6019  
E-mail : lib@uedawjc.ac.jp